

女子中高生のための関西科学塾 2012



女子中高生のための関西科学塾は、文部科学省関連の法人、科学技術振興機構の「女子中高生の理系進路選択支援事業」から助成を受けて行われる、科学実験教室や講演会を主体としたイベントです。より多くの女子中高生が、将来理系の職業を選ぶよう、理系のおもしろさに興味を持たせることを目的に開催しています。毎年関西の大学が持ち回りで主管校になり実施しています。今年度は、9月10日から3月18日まで、大阪大学を中心に、神戸大学、大阪府立大学、奈良女子大学、京都大学、けいはんな学研都市の研究所などで全5回の日程で開催されます。

10月22日(土)には、京都大学においても、高校生を対象として第2回が開催されました。本学の理系研究者9名が講師をつとめ、8つの実験授業が行われました。

参加者は、まず吉田北キャンパス理学部校舎に集合し、理学研究科社会交流室 常見 俊直 研究員より、関西科学塾の目的や実験参加にあたっての注意事項について説明を受けました。その後、8つのグループに分かれ各実験のスペースに向かいました。

女性研究者による実験の一部を紹介すると、物質—細胞統合システム拠点の原田慶恵先生の授業では、蛍光色素を用いて、生き物の設計図であるDNAを観察しました。参加者は、何種類ものピペット型分注器を使っ

て、ラムダファージ（細菌に感染するウィルス的一种）DNA、蛍光色素（YOYO-1）などが入った溶液を作り、蛍光顕微鏡を使ってブラウン運動の様子などを観察しました。人間・環境学研究科の幡野恭子先生の実験では、ヨーグルトや納豆、琵琶湖疎水などで生きている微生物の姿、蛍光色素で染め分けた細胞小器官の様子などを顕微鏡で観察しました。参加者はさらに、卓上走査顕微鏡、透過電子顕微鏡で、花粉の表面構造や緑藻細胞内部の微細構造を拡大して観察し、写真撮影を体験しました。

女性研究者支援センター広報 WG 主査の山末英嗣先生も「光触媒で汚染物質を分解してみよう」を担当しました。様々な濃度のメチレンブルー（色素）の吸光度を測定した後、光触媒である酸化チタンを加え、ブラックライトをあてて分解の結果を測定しました。光触媒の不思議な能力を体験するうち、瞬く間に時間が過ぎました。

当日は天候に恵まれませんでした。高校生38名、中学生2名、同伴者14名が参加し、同行した大人も含めて、理系分野への興味や実験の面白さを分かち合う充実した一日となりました。



京都大学（10月22日）のプログラム

	講師	実験名称
1	野村 英子（理学研究科）	星からの光を科学する～色やスペクトルによる星の分類～
2	渡邊 裕美子（理学研究科）	鍾乳石と樹木から探る むかしの天気
3	川畑 貴裕（理学研究科）	電波に耳を傾けよう～ゲルマニウムラジオの製作にチャレンジ～
4	前川 真吾（情報学研究科） 小林 茂夫（情報学研究科）	みてわかる生物学 ～クラゲの蛍光タンパク質で感覚のナゾにせまる～
5	原田 慶恵（物質—細胞統合システム拠点）	DNA を顕微鏡で観察してみよう
6	幡野 恭子（人間・環境学研究科）	生物のミクロの世界を実体験 ～身近な微生物を光学顕微鏡・電子顕微鏡で観てみよう～
7	山末 英嗣（エネルギー科学研究科）	光触媒で汚染物質を分解してみよう
8	舟橋 春彦（高等教育研究開発推進機構）	光の示す不思議な世界

女性研究者研究活動支援事業 合同シンポジウム

11月1日、2日の2日間にわたり、女性研究者研究活動支援事業 合同シンポジウム「女性研究者支援に向けた持続可能な取組の実現～」が、筑波大学にて開催されました。

1日目の午前の部では、平成18年度～22年度採択機関によるグループディスカッションが行われました。

◆各グループのリーダーとサブリーダー

	グループリーダー	サブリーダー
A	北海道大学 有賀 早苗氏	東北大学 田中 真美氏
B	東京大学 三浦 有紀子氏	日本大学 野呂 知加子氏
C	東京農工大学 宮浦 千里氏	産業技術総合研究所 澤田 美智子氏
D	名古屋大学 榊原 千鶴氏	岐阜大学 三宅 恵子氏
E	広島大学 坂田 桐子氏	奈良女子大学 春本 晃江氏
F	長崎大学 大井 久美子氏	宮崎大学 伊達 紫氏

京都大学が参加したEグループでは、広島大学 坂田桐子氏がリーダーに、奈良女子大学 春本 晃江氏がサブリーダーとなって、大阪大学、神戸大学、岡山大学、奈良先端科学技術



大学院大学、大阪府立大学、京都府立医科大学、関西学院大学の代表者とともに、意見交換を行いました。テーマは、(1) 女性研究者が子育てや介護を両立させる上で良かった取り組み及び成果（課題や解決方法含む）、(2) 上層部への働きかけの具体例（女性研究者数を増やす施策や上位職を増やす施策）の2点で、まず、各大学がテーマに沿った発表を行い、それを受けて、ディスカッションを行いました。



午後には、筑波大学長 山田 信博氏の開会挨拶にて、全体会を開始し、文部科学省科学技術・学術政策局長 合田 隆史氏、内閣府男女共同参画局長 岡島 敦子氏より来賓挨拶がありました。そして、文部科学省科学技術・学術政策局 基盤政策課長 板倉 周一郎氏からは、施策の説明がありました。



続いて、午前のグループディスカッションの成果を各グループから報告し、独立行政法人科学技術振興機構 科学技術システム改革加速プログラム主管 山村 康子氏より、コメントをいただきました。

最後に、筑波大学副学長・理事 鈴木 久敏氏の閉会挨拶で、閉会しました。



女性研究者支援に向けた持続可能な取組の実現～

初日の最後に茶話会があり、参加者が自由に意見交換を行いました。また、この場で各機関からの事前投票によって選ばれたWEB大賞の発表が行われました。①デザイン賞は、名古屋大学、②コンテンツ賞は京都大学（女性研究者養成システム改革加速事業）、③ユーザビリティ賞は、東京工業大学でした。



2日目の午前は、「効果的な取組事例」の報告が行われました。九州大学 上瀧 恵里子氏、東京農工大学 宮浦 千里氏、東北大学 田中 真美氏、北海道大学 有賀 早苗氏、名古屋大学 東村 博子氏より、発表がありました。そして、筑波大学男女共同参画推進室長 吉瀬 章子氏より、まとめと閉会挨拶がありました。

午後には、サイドイベントとして、採択機関有志による各種取組の発表を行いました。

◆サイドイベントの発表者とテーマ

	発表者	テーマ
1	京都大学 犬塚 典子	合同シンポジウム（2010）を振り返って
2	広島大学 坂田 桐子氏	広島大学における学童保育
3	東邦大学 中野 弘一氏	私大における病児保育の設立と運営について
4	岩手大学 菅原 悦子氏 東北大学 田中 真美氏	非常時における男女共同参画～震災を振り返って～
5	九州・沖縄アイランド 女性研究者支援ネットワーク	地域におけるネットワーキングについて
6	筑波大学 沖永 友貴枝氏 小野 美幸氏	ポスドク・キャリア支援について

発表の後、質疑応答に続いて、独立行政法人科学技術振興機構 科学技術システム改革事業推進室長 塩満 典子氏より講評をいただきました。

その他、各機関の取組を掲載したポスター展も開催されました。



保育園待機乳児のための保育室

9月1日に開室した平成23年度保育園入園待機乳児のための保育室では、9名の乳児が生活しています。静かに眠っている時間が多いのですが、時には、隣の子と関わりをもって、遊んでいる姿も見られます。



女性のための相談室 開室日 【要予約】

[12月] 2日、9日、16日、22日 [1月] 6日、13日、20日、27日 [2月] 3日、10日、17日、23日、24日

連載：研究者になる！－第36回－

研究は誰のためのものか

アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授 伊藤 正子



この欄は、研究者志望の若い女性にロールモデルを示しメッセージを発信するのが目的のことである。私は研究職ではない仕事をしばらくしてから退職して大学院に入った口であり、既婚であるが子供もおらず子育ての苦労もしていない。今のところ親の介護の大変さも知らない。しかし、試行錯誤のやり直し例があってもよかろうと勝手に解釈し、執筆依頼を引き受けた。

専門はベトナム現代史である。ベトナムがまだ国際的に孤立していた1980年代半ば、私は大学に入学し、後に院生時代の指導教官になるF先生の「東南アジア史」を選択必修でまたまた受講した。一方、故郷の広島を離れて、カトリックのシスターたちが経営する東京の女子寮で暮らしていたが、そこにベトナム難民でシスターたちの世話になっていたKさんがおり、彼女の受験勉強のため家庭教師を引き受けた。そのうち「東南アジア史」の講義は現代ベトナムに進み、Kさんが自分の目の前に座っている背景を初めて理解した。机の上の勉強と現代という時代がオーバーラップし、大国アメリカに勝利したベトナムという国に強く惹かれた。しかし、進学した東洋史学科では「大学院に進学するなら、テーマは1945年以前のことにするように」と言われ、文化大革命中の中越関係について卒論を書くつもりだった私は、就職を目指すことにした。

もともとアジアに関する報道がしたかったのでこの選択に迷いはなく、新聞社とテレビ局を受け続けた。均等法2年目であったが、実態は全く「均等」ではなく、「男女差別」を初めて体験し、悔しい気持ちを何度も味わったが、どうにか新聞社に就職した。しかし好きなことはとことん頑張ることができるが、興味がないと熱心にできない性格は新聞記者には向かなかった。新聞記者はオールラウンダーでないといけない。さらに会社の留学制度もなくなり、アジアの報道をするという夢も叶いそうにないのが見えてきていた。そこで3年弱で会社をやめ、アジアに関わることをしたいと考えて大学院に入り

直した。

修論を書き、90年代半ばにようやくベトナムに留学した。当時ベトナムではドイモイ（刷新）政策は始まっていたが、私が研究対象としていた少数民族地域で調査をした外国人はまだいなかった。それがかなり困難であることを全く自覚していなかった私は、ベトナム語のレベルも不十分なうちから公安の許可をとるべく奮闘した。怖いもの知らずが幸いし、短期ながら山間部住み込み調査もできた。博論はこの調査をもとに、少数派として国民国家の下にありながら、多数派に同化せず、しかも必ずしも紛争や分離運動へと向かわない人々の生き方を検討した。

新聞社退職後大学院入試準備に1年費やし、大学も1浪だったので、院の入学時点で同級生は最大5歳下だった。さらにオーストラリアに1年、ベトナムに2年留学し、35歳まで院生だった。ベトナム留学の奨学金も、学振特別研究員も初めて応募したのが応募可能年齢最後の年であり、私大から京大に移った時の公募要領には「採用時40歳以下が望ましい」とあったが既に41歳で、赴任後「一歳オーバーだったけど」と言われた。つまりどれも「ぎりぎりセーフ」の綱渡り状態で、運が相当よかったと思う。

以上のように、ロールモデルにはなりえないので、メッセージの発信だけで許していただこう。ベトナム反戦時代ではない私は、日本国内では平凡な一市民として過ごしてきたが、ベトナムでのフィールド調査の過程で、研究対象をベトナム国家が外国人につついて欲しくない「少数民族」にしたために、「国家」を相手にせざるを得ない場面に遭遇し、「国家権力」について色々と考えさせられることになった。その結果今思うことは「国家のためにする学問は危険である」ということ、国家に「オルタナティブ」を提示できてこそ研究者であるということだ。もちろん自国に対しても同様である。地域研究では、最近「地元貢献する」とか「地元役に立つ研究を」などのスローガンを掲げるのがはやりだが、「地元」をどのレベルに設定するかによって、容易に御用研究に成り下がってしまう危険性を常に肝に銘じておきたい。



Center for Women Researchers

〒606-8303 京都市左京区吉田橘町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>